

アユの漁獲と資源状況について

1. 今シーズン(H29年12月～)のアユの漁獲状況

①鮎苗(活魚)の漁獲状況

- ・12月の漁期開始以降、6月末現在までの漁獲量は85トンで平年の81%。
- ・3月まではエリが主で、不漁だった昨年の2.5倍だが平年の68%で推移。
- ・天然産卵が極めて少なかったことから、5月以降は漁獲の伸びが期待できないと予測していたが、ヤナ(河川)は4月、5月は平年以上の漁獲があった。
- ・一方で、4月以降エリは平年の40%前後と低調で推移。

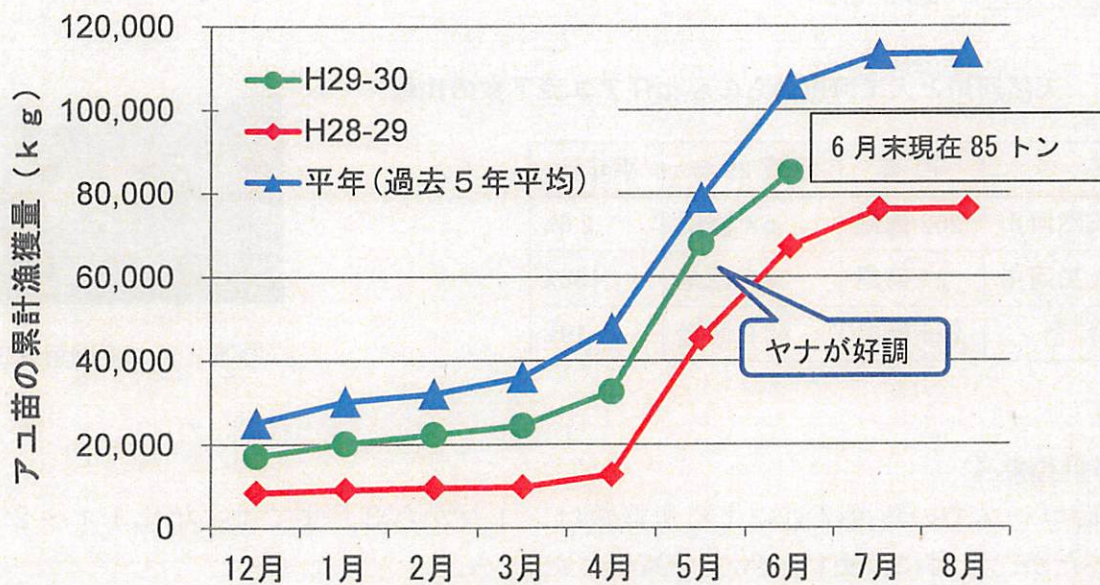


図1 鮎苗の漁獲量の推移の比較
(漁法: エリ、ヤナ、追いさで網)

②鮮魚の漁獲状況

- ・刺網では1隻あたり数十キロの漁獲があり、昨年よりは多いが平年の半分程度。
- ・6月から始まった沖すくい網では、多い日で1隻300kg程度漁獲されるが、多くが1日1隻10～300kgとばらつきが大きく、平年より少ない状況。

2. アユの資源状況

① 昨年の産卵状況

- ・昨年秋の天然河川での産卵は2.7億粒で平年の101億粒に比べて2.6%と極めて少なかった(図2)。
- ・アユ産卵用人工河川に放流する親魚を増やし(8トン→18トン)、例年より多く産卵させたが、天然河川での産卵が少なかったため、全体としての資源は平年の20%弱と推測(表1)。

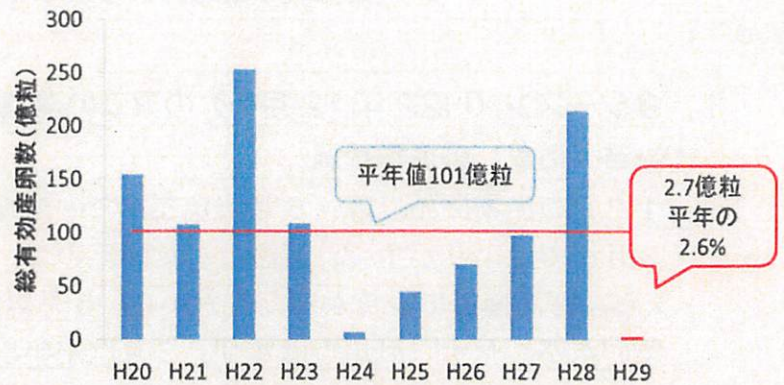


図2 産卵数の推移

平年値：過去10年間のうち最大・最小を除く平均値

表1 天然河川と人工河川からのふ化仔アユ流下数の比較

	平 年	平成 29 年	平年比
天然河川	202 億尾	5.4 億尾	2.6%
人工河川	24 億尾	38.5 億尾	160%
合 計	226 億尾	43.9 億尾	19%



写真 アユ産卵用人工河川

② 魚群調査結果

- ・周回コースでの魚探調査による魚群数は、1月から3月までは平年比11～25%であったが、4月には更に4%まで減少した。
- ・しかし、5月以降増加(38%)し、6月には平年比41%となった(図3、4)。

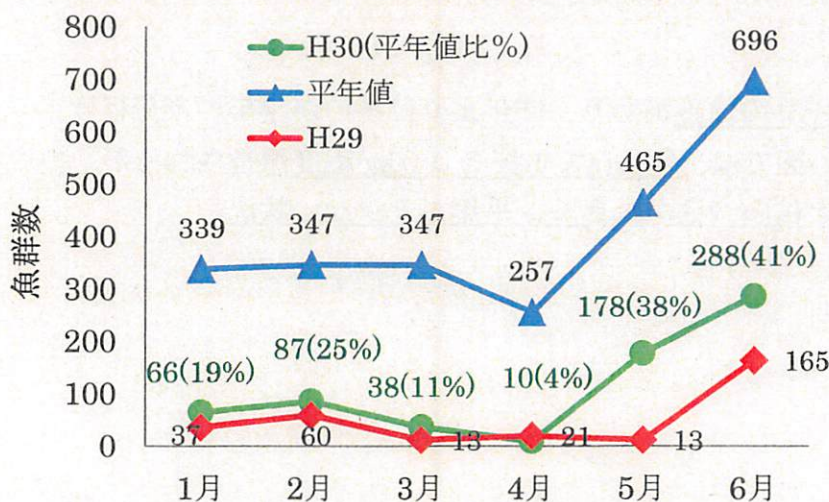


図3 平成30年周回コース魚群数の推移

平年値：過去10年間のうち最大・最小を除く平均値



図4 6月周回コース魚群調査結果

- ・ 全域魚群調査(トランセクト調査)では、3月までは高い密度の群れが沖合に分布していたが、4月以降徐々に沖合では少なくなり沿岸部で多くなった(図5)。
- ・ 不漁であった昨年の調査結果でも同様の分布変化が確認されており、アユの生態として、4月以降に高い密度の魚群が沿岸部へ移動するものと推測される。
- ・ 5月以降では昨年と比較して、密度の高い群れが全域の沿岸部で確認された。
- ・ 魚群数は3月の147群から徐々に減少し、6月には57群と1/3となったが、4月以降はおおむね昨年を上回って推移した。

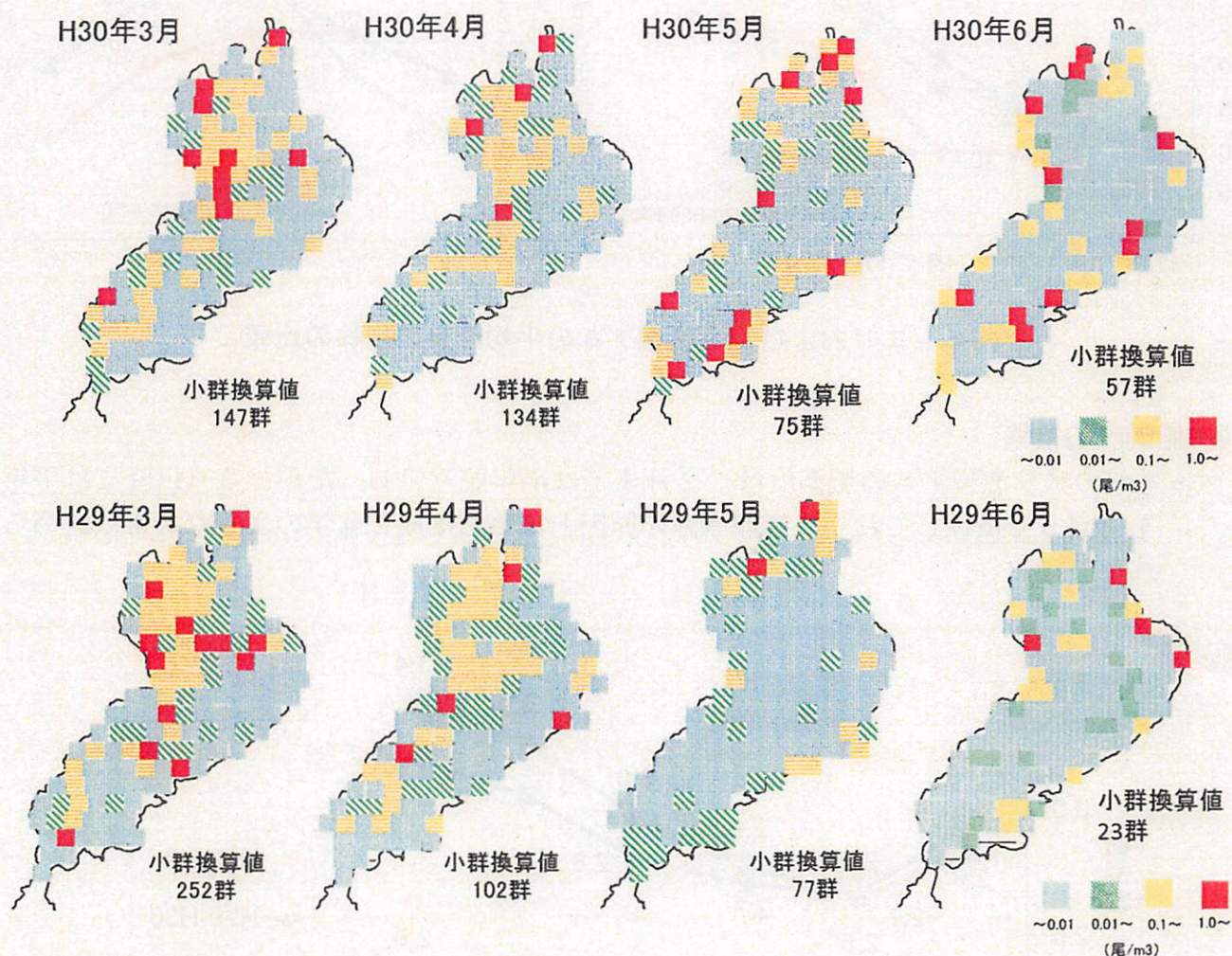


図5 科学計量魚探による全域調査(トランセクト調査)結果の比較

③ 平均体長の推移

- ・エリ漁獲アユの平均体長は、昨年と同様に3月～4月にかけて伸びがみられなかったが、5月以降伸びがみられ、6月には平年と同じ61mmとなり、不漁であった昨年のような成長遅滞はないと考えられる(図6左)。
- ・ヤナでは3月～4月では平年を下回ったが、5月には平年をやや上回り、6月では平年と同じ89mmとなった(図6右)。

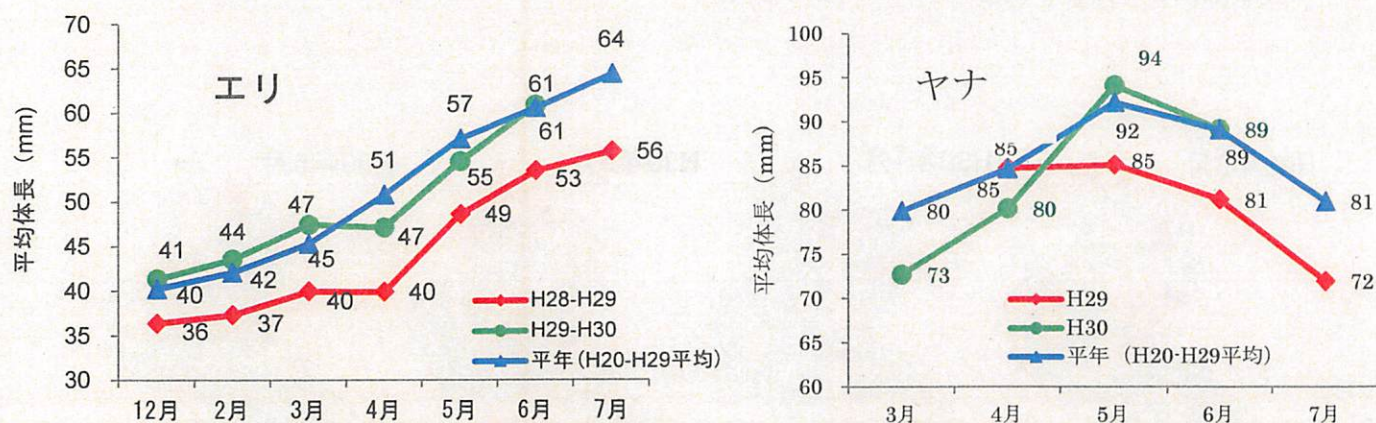


図6 エリおよびヤナ漁獲アユの平均体長の推移の比較

④ 肥満度の推移

- ・本年のエリ漁獲アユの肥満度は、2月までは平年並みであったが、3月以降では平年を上回って推移しており、産卵激減の原因となった平成24年のような異常は認められない(図7)。

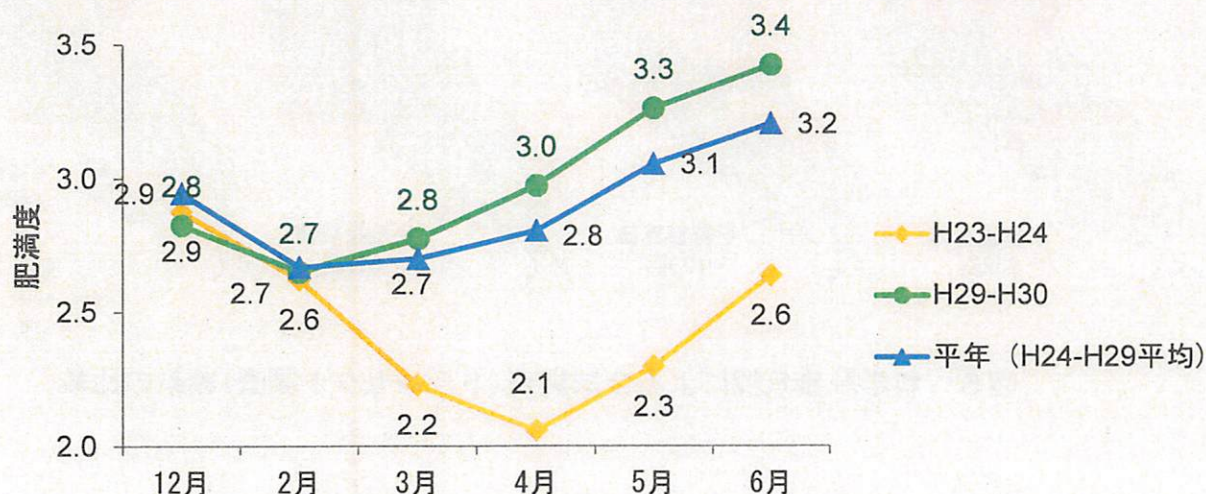


図7 エリ漁獲アユの肥満度の推移の比較

3. 資源の評価

- ・魚探調査と漁獲量は増加傾向であるが、ふ化日組成から、今シーズンのアユは人工河川からの早生まれ(9月生まれ)がほとんどで、主に9月生まれが漁獲されているものと考えられる(図8)。
- ・6月魚探調査での資源水準は41%であるが(図3)、今年度は早生まれが多いため、成長が良く魚群を形成するものが多く、例年よりも過大に評価されている可能性がある。

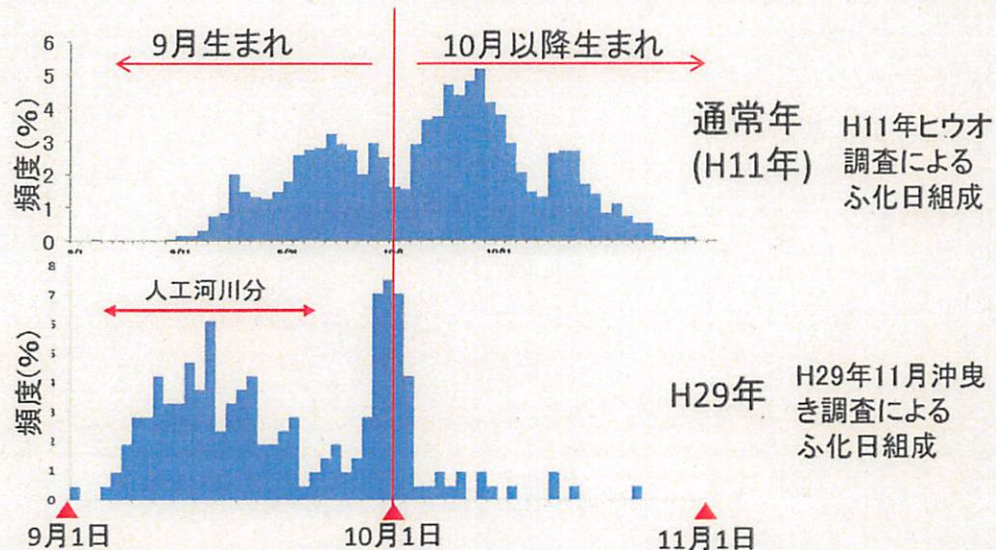


図8 耳石日輪計数によるふ化日組成の比較

通常年(平成11年)と比較すると、平成29年は10月以降生まれ(遅生まれ)が非常に少ない。

4. 今後の取組

①資源対策

- ・昨秋の天然産卵が少なかったため、来シーズンのアユ資源を確保するため、本年度の人工河川への親アユの放流量は、通常の8トンに7トン追加して計15トンの計画。
- ・6月29日に県漁連、河川漁連、淡水養殖組合、水産加工組合の4団体連名にて更なるアユの追加放流について知事あて要望された。
- ・水産試験場の研究により、早生まれ(9月生まれ)のアユはほとんど産卵に貢献しないことが明らかとなった。
- ・今後の資源状況を注視しつつ、人工河川への親アユの効果的な放流時期を検討していく。

②不漁原因の解明

- ・昨シーズンの不漁原因については、昨シーズンはアユのふ化が10月以降に遅れるとともに、一時期に集中したことによる密度効果などにより、著しく成長が遅れたためであると一定の絞り込みを行った。
- ・水産試験場と琵琶湖環境科学研究センターが連携し、国立環境研究所琵琶湖分室、国の水産研究機関の助言もいただきながら環境面など広い視点を含め、引き続き検証を進めている。